

「早生米・異聞」

上沢(金取)地区

「松岩百話集」「上沢自治会創立三十周年記念誌・三十周年のあゆみ」から

日本政府による米の減反政策はもう三十年以上にもなる。戦後、日本が工業立国として発展するに従い、第一次産業である農林水産業の就労人口は減少してきた。食生活は、魚・米から肉・麦へと変化し、日本は、電気や機械の製品輸出と引き換えに大変安い肉や麦が輸入されるようになった。最後の砦である米の、価格の安定維持と生産自給率の百パーセント達成のため、減反政策はとられてきた。

だが、細川護熙政権期に、諸外国との貿易協定ウルグアイラウンドにおいて、歴史上で初めて「豊葦原千五百秋・瑞穂の国」たる日本は、とうと



う、米の輸入国となった。当初、大概の輸入米は米菓にまわされていたが、平成五年、事態は一変した。この年は、天候不順により凶作となったのだ。国産米は大変な高値となり、日本国中が米不足になった。米不足が米店の不売という非常識な行動をも誘発した。減反が裏目に出たのだと農業団体は声高に叫んだものだった。

気仙沼市でもこのようなことは起こった。初めて食べるタイ米……。日本米のうまさ、心からわかった。日本人でよかった、幸せだった、とつくづく感じたものだ。農家の皆様への尊敬の念が深くなった。中小農家は、最近になつても、米は作るより買った方が安いのだと言っている。ここ気仙沼、当地方の農家の皆さんは、それでも作り続けている。何がそうさせるのか。日本人だからなのか。

面瀬地区にも随分たくさん田んぼがある。平成二十四年のこの夏、去る平成二十三年三月の大津波でさらわれた田んぼ以外には、青々とした稲穂が夏の太陽のもとで重く頭を垂れている。よほどの天候不順の年でなければ、ここ十数年はずっと豊作が続いている。米の品種改良、機械化、農薬の改良などのおかげであろう。

面瀬川の両側に、上流に向かって田んぼが続いている。上沢の金取地区からもう少し進んでいくと長の森の上り坂となる。その辺りは早生米(わせまい)という地名である。



米との関係が深かるう。地名がついた当時、米は命、米は金と同等だったのだから。米を軽んずる現代。いつかしつべ返しにあうだろう。

この、「早生米」の道ばたのやや奥に、かなり年月のたった碑がある。風雨に晒されて、もう文字は読めない。いつごろのものだろうか。江戸時代初期なのか、室町時代なのか、時代は不明だが、とある若者の供養碑である。この碑の言い伝えを聞くと悲しくなる。人間の欲望と残酷さを思い知らされる。この早生米の地に、この若者の腹をさいて、食べたばかりの米を盗み取ったという伝承がある。供養碑は、若者の墓とも言われている。この伝承の米は「やごめ」「焼米」とも言われている。早生米つまりまだ完熟していない青米を、食用にするためにもみすりして焼き、餅のようにしたものだ。これは子供のおやつになるくらいにうまいものだそうだ。

「早生米」の地には、どこぞの戦で敗れた落ち武者のすみかが十数軒あったという。かれらのしわざかどうかは分からないが、神隠しがよくあったそうだ。ここではそんな言い伝えをもとにして「新・昔ばなし」



をご披露しましょう。

ときは江戸時代。でもね、この話では若者の命が助けられるから、こわがらずに読んでください。

本吉の狼の巣に住んでいるいちは、母親からの頼まれものがあるが、松崎村に向かっていました。昼でも暗い長の森をぬけて、やっと松崎村の手前、金取に近づいてきました。ふと見ると、道の左脇に古い石碑が建っています。苔むしてはいるものの、石碑をよく見ると、何とか「米」という文字が読めました。いちは何のことだろうと考えました。こんなに古い石碑なのだから、きっといわれがあるに違いない。こう思い、石碑に向かって手を合わせました。

いちは道を急ぎました。歩いていると、何だか誰かに後をつけられているような気がします。後ろを振り向きますが、誰もいません。体がぞくぞくして、いやな気持ちになりました。もう夕暮れが近くなりました。秋の日はつるべ落として



す。不安になって辺りを見回すと、右手の山側に人家が見えました。薄明るく灯がともっています。いちハ心の中で、助かった…とつぶやきました。何とかたどり着きたいちは、その家の戸口に立って、

「すみません。夕暮れになって足下が暗く難儀しております。灯りでも貸していただけないですか。」

と少しふるふる声で言いました。すると家の奥から

「こんなに暗くなつて…お気のどくですね。どうぞお入りなさい。」

と年老いた女が顔を出しました。真っ白な髪をきれいに結んでいます。身なりは質素ですが、きちんと着こなしていました。いちハますます安心して、土間に足を踏み入れました。老婆は、

「土間なんぞにいないで、こちらにお入りなさい。もう日も傾いていますよ。一晚ここでお泊まりなさい。」

と言うのです。いちハ、さっき何となく人に追われていたようだったので、歩き続けるのは危険だと考えました。そこで、

「ごめんなさい。」

と部屋に上がりこみました。さて、布団に入って一時もしたころでしょうか。となりの部屋から声もれ聞こえてきました。

「よお、ばあや。焼米にあ飽きたけん、肉でも食べてえところだったよ。若いやつ肉

を食えるなんて、こりや、ありがてえ。ありがてえ。」

と。老婆の声も聞こえます。

「おいおい息子よ、百年前のあの日、男の腹からとった焼米を、うまいうまいと食ったのう。今までに何十人も何百人もの腹から、焼米を取って食わしてやっただろ。う。それを飽きたってかあ？、今度は肉かあ。」

老婆の声は悲しそうでもあり、子供をあやすようでもありました。

いちハ体がこおりついてもう動くことができせん。逃げたいのですが、布団が重くのしかかってくるのです。

恐怖でいっぱいのは、母親から、「困ったときや命に及ぶときは『南妙法蓮華経、南妙法蓮華経』と唱えよ。」と言われていたのを思い出し、おそるおそる声を出しました。

「南妙法蓮華経、南妙法蓮華経。」

繰り返すうち、力が湧きあがり、いちハありったけの声で唱え続けました。

するとどうでしょう、となりの部屋で、ものすごい音がしました

「ドタン、バタン。ギャーオー。ぬしは百年前に死んだはず、何を血迷ったか。」



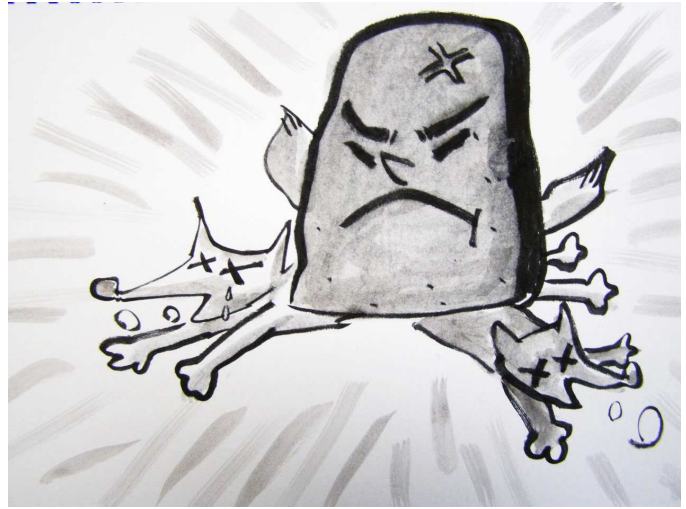
と老婆の声。すると男の声で

「うらみ骨髓(こつずい)。うぬらに腹さかれて米をうばわれ供養碑になったものの、あのくやしさは石になっても消えるはずはなし。となりの部屋の男の名はいち。おれの名もいち。ああ、不思議なるかな。ふたたび同じことはさせんぞ。不死の力で成敗(せいばい)してくれる。」

と。雷のように大きな、腹をつんざく爆音がしたかと思うと、急にとなりの部屋が静かになりました。

布団からはい出たいちがとなりの部屋を見ると、年取った大きな狐が雄雌二匹、血をはいて死んでいました。死がいの上にはあの長の森の麓の道端で手を合わせた供養碑が、二匹をこらしめるように乗りかかっていました。大昔に早生米で化け狐に殺された男の魂が、いちを救ったのです。

その後、村の者の手によって、供養碑はもとの場所にもどされました。もう、この辺では神隠しにあうこともなくなりました。



このような話がだもととなり、早生米からつくる焼米、やごめに関係することから、この地を早生米と呼ぶようになったのかもしれない。



→ 胃袋から焼米をとられた若者の墓 ↓
(供養碑)

